

や若手アーティストを主体としたワークショップを開催する点、市川市在住者をはじめその他の地域の人々に対して、アート創作活動の機会を提供する点である。そして、このようなアート・プロジェクトを通じて、人々が地域との関わりをどのように深めていくのかについて理解していく。このことは、近年、直島(香川県)や湯布院(大分県)のようにアートによって地域活性化を実現している地域がある一方で、全国で2000を超えると言われる地域系アート・イベントの大半が数年間の実施の後に継続困難になっているという現状を踏まえ、「なぜアートによって地域活性化が実現したのか」といったメカニズムを理解すると同時に、アート・イベントの持続可能性を考えることを通じて、地域の持続可能性の一つのモデルを提示することに繋がると考えている(北田他 2016、田島 2014)。

また、本研究におけるアート・プロジェクトの実施は単なるイベントの開催ではない。近年、社会学の分野では写真や映像、音楽、演劇、パフォーマンスなど文字以外のメディアを用いた調査あるいは調査結果の公表という新しい方法論に関心が集まっており、こうした手法は Arts-Based Research (アートベース・リサーチ) と呼ばれ、日本においてもその実践が端緒についたところである(岡原 2017)。本研究において、「なぜアートによって地域活性化が実現したのか」という問いは、問いの対象でもあるアートという技芸と切り離されることなく追求される。本研究の最終的な目的は「なぜアートが」だけではなく、「どのようなアートが」地域の活性化に寄与する力を持ち得るのかを明らかにすることにある。この時、そのアートの姿形は、報告書や論文といった文字メディアによって説明されるだけでなく、アートあるいはアート・プロジェクトそのものとして表現されることによって、別の地域に対する実践的な応用性を獲得することができると考えている。

ドクメンタ&ミュンスター彫刻プロジェクト報告会

2017年度は、地域に密着した形で実施している芸術祭やアート・プロジェクトの視察、インタビュー等を実施した。また、本学政策情報学部の非常勤講師である山内舞子先生(キュレーター)にご協力いただき、本学において公開報告会を開催し、本学の学生・教員だけではなく、一般の方や市川在住のアーティストの方も参加していただいた(合計約50名)。報告会の内容は、2017年に同時開催された国際展、ドクメンタ(5年に一度)とミュンスター彫刻プロジェクト(10年に一度)に参加した日本人のアーティスト、ギャラリスト、キュレーターの方々から国際展の歴史や現場の雰囲気、作品の感想などを報告してもらう、といったものである。

もちろん、開催地域に関する議論も行われ、例えば、この国際展では、アート鑑賞に訪れた人と地域住民の交流が生まれる仕掛けを作っていたという。具体的には、各アート作品は開催地域の至る所に点在しているため、鑑賞者は各アート作品の展示場所を示した地図を見ながら自転車などで移動するのだが、その地図が微妙に間違っており、最終的には、地域住民に聞かないと作品まで辿り着けなくなっているのがある。鑑賞者と地域住民とのこのような交流は、単にアート作品を鑑賞するだけではなく、その地域でアート・イベントを開催する一つの意義を見出すことに繋がると考えられる。

2018年度の予定

実際にアート・イベントを実施し、アーティストや地域住民との交流、アート作品の創作活動を通じて、人々が地域との関わりをどのように深めていくのかについて理解していく。これに加え、地域活性化におけるアートの可能性や役割について考察するために、引き続き、インタビュー調査を実施する。また、特定地域においてアンケート調査も実施し、定量的な側面からも議論を行う。

参考文献

- 井関利明(2015)「『政策情報学』の構想」『政策研究を越える新地平』中道寿一・朽木量編著、10-18頁。
 岡原正幸(2017)「アートベース社会学へ」『哲学』138、1-8頁、三田哲学会。
 北田暁大・神野真吾・竹田恵子編(2016)『社会の芸術/芸術という社会 社会とアートの関係、その再創造に向けて』フィルムアート社。
 田島悠史(2014)「小規模アートイベントの持続性と有用性に関する研究」慶應義塾大学、博士論文。
 山口徹・榎沢順(2004)「歴史・対話・街の創出：市川オープンミュージアム構想」『千葉商大紀要』、42(3)、235-259頁。